

松本通孝先生

フランス革命をどう教えてきたか？

「教師の思い」と「生徒にとっての授業」

1 はじめに

高等部で教え始めた当時(1967年)は、フランス革命を長時間かけて熱く語る授業をしていた。それは「あの時代の産物」と考えられるが、その後、どう変わって行ったのか。

教科書全体のページ数に占める割合から見てみると、フランス革命やナポレオンに関する記述は、明治時代は8%、1950年代は4%、1970年代は2.5%、2000年は2%と減少する一方。内容も簡素化し、1970年代は細かく記述があったものの、今はさらに簡単になっている。

理由としては、以前は世界史の範囲がヨーロッパ・中国くらいで大学受験できたのに、今は中央アジア・アフリカなど範囲が広まった。センター試験で、世界史選択受験者が減ってしまったので、世界史の時間数が減った。

フランス革命を教える意味が変化してきたこと。それをこれから学んでいきたい。

2 戦前におけるフランス革命史教育

江戸時代にフランス革命の情報がどのようにもたらされたか？鎖国であったが、出島には外国人がいて情報を得ることができた。外交とか他国との交流と呼べるようなことが実際はあったが、知り得た日本人はごく一部の者に限られていた。フランス革命は、「阿蘭陀(オランダ)風説書集成」により1794年(フランス革命1789年の5年後)に伝えられている。しかしナポレオンに関する情報は、ロシア人(漂流民)により伝えられた。それは、ナポレオンがヨーロッパ全土を支配しオランダという国が無くなっていたため。フェートン号事件もその表れである。

幕末、世界の情報がどんどん入ってきて、蘭学(オランダ)よりも英学(イギリス)であると気がつく。知識を得た知的エリートたちは開国派となっていく。世界を学べば、分かることで、先進国に追いつきたいという意識が芽生える。

明治時代、政府中心人物の外遊によって世界情勢を知り、キリスト教の弾圧が解け、1872年学制が發布される。2年後青山学院の基となる小学校開校。文盲をなくすことを唱えるも、

農民には届かず、百姓一揆など起こる。文部省「史略」には、皇国・支那・西洋上・西洋下があり、神話から始まるヨーロッパの歴史を万国史として捉えるようになった。その歴史観がずっと変わらなかった。欧米礼賛で良かったのだろうか。

当時は、アメリカ北東部で使われていた教科書を翻訳したもの「斯因頓氏 万国史要」「パーレー 万国史」を教科書として使っていた。キリスト教中心、白人中心、ヨーロッパ以外は出てこない。舶来物が良いとされていた時代。

明治時代はフランス革命の何が強調されたか？人権宣言は軽視され、独裁と処刑については悪いことや民衆の暴徒化は危険ととらえ、ナポレオンの軍事戦略・カリスマ性を学んだ。

3 戦後のフランス革命史教育

学習指導要領は、先生が考えるべきものと、文部省が試案を出したものだだったが、その後 1955 年、こう教えるようにと文部省が指示してきた。

戦前の軍国主義を批判、二度と戦争を起こしてはならない、それには封建制を打破すること。そのモデルケースとしてフランス革命を捉える。ブルジョワ革命・絶対王権を市民が打破した、その経験をしたフランスを真似して、日本に健全な中産階級を作り出す。

では明治維新は何だったのか？ 明治維新論争が起きるが、『近代』を創り出すためにフランス革命が理想とされ、授業でも強調していた。

高度経済成長、GNP 世界 2 位になり、近代化を学ぶ意味があるのか？歴史学の混迷が始まる。ベトナム戦争でアメリカは敗退したが、日本では民衆・学生運動も下火となって行った。「権利章典」「独立宣言」「人権宣言」の何を生徒たちに伝えるべきなのか？歴史教育でも混迷が始まって行った。

4 最近のフランス革命史教育

経済発展し近代化してきた日本。経済の近代化から歴史をみる必要、社会史の登場。これまでは政治史であり、筆頭に立つ人の歴史であったが、一般の民意はどうだったか？登場するのは男性ばかり、本当にそれが歴史なのか？危険を承知で、民衆を革命に駆り立てたものは何だったか？ 欧米中心史観に代わるものは何だろうか問われている。

教育の問題として、団塊の世代にひずみが集中した。大学受験が難関となり、大学生の不満から大学紛争。おちこぼれ（おちこぼし では？）・校内暴力、新人類、地域社会の権威が無くなってきて自分の論理だけを主張する者たちの登場。

それまでの問題を解消する為に、ゆとり教育で生きる力、応用力を育てる。詰め込みをやめて 3 割カット、土曜日の休校など、その中で社会科の解体が始まる。しかし、P I S

A（学習到達度調査）が日本の学生の学力低下を指摘すると、ゆとり批判から教育再生会議が作られる。生徒が振り回され、可哀想。

フランス革命 200 年祭に当たる年、1989 年、昭和から平成へ、東欧社会主義の崩壊、天安門事件が起きる。フランス革命は、今までのような典型的な市民革命という捉え方のままでいいのか？

EUができて、国民国家（一民族で構成される国家）にこだわるのはどうなのか？いかに国民国家を乗り越えるかが課題となってきた。

「人および市民」の権利宣言の、人とは誰か？男性だけの権利宣言、それを過大評価していた。ナポレオン法典は女性を男性に従うものと考えていた。それが今日まで、影響していた。女性、植民地の奴隷など、弱者と呼ばれられるものにとって、どうだったのか。

5 これから歴史・フランス革命史教育の在り方

世界史未履修の問題は、日本史ばかり教えていたからであるが、ではどうして世界史が必要なのだろうか？歴史教育は暗記だけなのか、歴史的思考力をどうやって培うのか？材料を与え、それを基に解釈を教えるべきでは。「世界史」必修をやめ「歴史基礎」とするのが良いのか？今までの歴史教育を批判して暗中模索の状態である。

国民国家論をどう乗り越えるか。現代と共通の視点で、政治史は軽く、これまで目を向けられなかった立場の人の歴史も考えてみては。

6 おわりに

以上みてきたように、フランス革命を教える視点は時代によって変化してきた。現在はかつてに比べ、理念を教える意味が減少してきているかも知れない。ただ、私としては、その「理念」から現在の日本社会は学ぶべきことがまだまだ多いのではないかと思っている。特に「弱者」の視点からの捉え直しが必要と思っております。

質問や感想は、メールでお願いしたい。

皆さんを見ていて、感じるのは…世界中に行く機会があるだろうが、行った場所にはいろいろ歴史的な物がある。これまで学んだ事の大半は忘れていくかもしれないが、覚えていることを思い出し、関連づけてみてほしい。また、何人か集まって(学んだことの)一つの話で語りあってほしい。例えば還暦の機会に自分史を書いて、これまでを振り返ることは、これからの生きる指針になるのではないか。歴史だけでなくいろいろ学ぶこと、人生は一生勉強だと思う。

参考文献

- 「斯因頓氏 万国史要」 青山学院大図書室在庫 1880年代
「史略」文部省刊
「世界史なんていない」南塚慎吾
「学術の動向」油井大三郎 日本学術会議
「新しい世界史へ」羽田正
「和蘭風説書集成」
「詳説 世界史」
専修大学・ミシェルベルンシュタイン文庫 フランス革命資料
「江戸のナポレオン伝説」岩下哲典
東書文庫・十条 戦後の教科書
「女性の市民の権利宣言」オランプ・ド・グージュ